# ギリシア軍事政権下の作家たち

## ――現下のギリシア文壇事情――

竹部琳昌

### 一

エーゲ海の美しさは筆致につくしがたい。波はぶどう酒色にきらめき、浜辺は茶色に、岩はグレーに輝いている。さまざまの色彩の中でも、とりわけ鮮明に浮ぶのは家の白さである。照りつける太陽の下で、人々は手足をのばして身体をやいている。旅行者たちはこの風景の美しさと、気候の心地よさを讃嘆してやまない。このような風土から、現在我々にセンセーショナルに報道されてくるのは、世界の船舶王と元大統領未亡人とのユートピアのような生活ぶりである。

しかし、このような極楽の島から数海里はなれた所にいくつかの地獄の島がある。そこには政治犯の刑務所があって、一九五〇年代の国内戦争で敗れた、共産パルティザンや、六〇年代に入って現軍事政権によって逮捕された自由主義者たちが収容されている。

A・レンタキス（一九三五頃―）という若い詩人は、軍事政権によって逮捕され、四年間収容された、オロポス島の

刑務所の生活を、こう歌っている。

遠いどこかは雨だったようだ、
こゝで　それが感ぜられる、
風が冷たくなってきたから。
波が打ちあげた空き缶が、
鉄条網の向うに見える時、
近いどこかの生活の脈動に気づく。
避暑客、遊覧船、
海水浴場、トランジスター。
あまりにもかけはなれた僕たちの生活、
距離では五メートルしかないのに。

ホメーロスの叙事詩によれば、オデュッセウスはトロイアから故郷のイタカに帰るまで、二十年間もエーゲの海をあちこち放浪することを余儀なくされた。至福の島で親切な人々によって手厚くもてなされたこともあれば、怪物や魔女の住む恐怖の島から命からがら逃げ出したこともあった。これは今でも変らない。否、むしろ、幸福の島々の中に、地獄の島があちこちに作られたのは、つい最近のことである。

この上もなく陽気な、自然の恵みに充たされた表の生活の裏には、この上もなく恐ろしい暗い闇が拡がっている。

それが現代ギリシアの姿なのだ。その眼光によって人々を石と化した魔女メドゥーサの物語は古代ギリシアだけの神話ではない。それはあまりにも現代ギリシア的神話である。軍事政権という恐ろしいメドゥーサが国中を濶歩しており、それに睨まれると人々は石と化してしまうのである。

さて、このような政治的雰囲気の中で、作家達はどんな状況におかれているか、何を問題とし、問題とせねばならないかについて、その紹介を試みたい。勿論、ギリシア本国では言論・出版は極度に制限されている。だから現在のギリシア文学事情をさぐるためには、もっとも適切な資料は断片的に紹介される英米独仏などの外国文化雑誌しかない。

ギリシア軍事政府は国内の暗黒面をひたかくしにして、ギリシア程自由な国はないと宣伝している。これらの新聞を通しての宣伝文のいくつかを挙げれば、「アテネへの旅行者は、古代から現代迄どの世紀でも見てまわることが出来ます。現代のアテネは急速に成長した商業都市であり、高層建築や新しいホテルが立ち並び、そこからちょっとはなれた所に、古代アテネがあります。」「サロニカ湾の岸では、気温調節装置のついたバンガローでお泊りなってもよい。また、広いホテルや小さなペンジョンもお好み次第です。去年の夏はソラヤやブリジッド・バルドーのような最高級の人々がここでヨットを楽しみました。」「『カッフェー・アテネ』の豪華なシャンデリアの下でインタヴューに応じて、ジョン・レノンとその妻洋子が語りました。われわれはここで自由と平和の革命を見たと。」

しかし自由であると強調しすぎて、自ら馬脚を現わすこともある。「外国から報道されるギリシアは残念ながら客観性を欠いております。ここでは民主主義は破壊されておりません。ただ共産主義の前段階の過程にある腐敗堕落した政体がくずれたのです。健全な民主主義への道を開くために、共産主義の方向へ向おうとするどんな動きも、我々

は自由の名において許さないのです。」

この恐怖の自由に反逆した人々は、今は束縛の身となっている。外国の最高級の旅行者が、生活を思う存分楽しんでいる時、その同じ場所で、面会日ともなれば、数時間も前から女たちは子供を連れて、刑務所の前に立ちならぶ。前におかれた重いカバンの中には、夫や父や息子にさしいれるメロンやブドウ、チーズ、肉などがぎっしりつまっている。この外国人旅行者の目には映らない恐怖の世界の作家達について語ろう。

## 二

「土着の者にとってはわかり切ったことだが、しかし外国人には考えられないような事柄について語り書こうとすれば、どこから始めてよいかわからない。特に単に文学作品の紹介ということではなくて、現在ギリシアの作家たちが直面している諸問題を、社会的政治的諸事情と連関させて論じようとすれば、一そうむつかしい。」とTh・フランゴプーロス（一九二三―）は『軍事政府と文学』という寄稿文の冒頭で述べている。（『アクツェント』誌、一九七一年第二号）以下この作家のものを骨組として、他の詩人たちの報告をも交えて、論じていきたい。

さて、現代ギリシア文学を論ずるには、次の三つの前提を確認してからはじめなくてはならない。しかしその三つはすべて否定的・消極的な面である。

まず第一には、ギリシアは一八三〇年代に独立したのであるが、それ以来今日に到る迄、民衆語と純正語との、外国人には理解しえないような、深刻な対立抗争が続けられてきている。純正語とは古代ギリシア語を模範とした言語形式である。しかし、数千年も経たのちには、古代アテネ人の語っていた言語形式はもう語られず死語となってい

る。生きている言語とは、現在民衆の中で語られている言葉である。この生きた話し言葉を土台として、言語をより高め洗練させようとするのが民衆語運動である。当然、文学は民族の心にふれ、良心に訴えるものである限り、生きている言葉即ち民衆語で書かれねばならない。

しかし、独立以来どの政権も民衆語を、古代ギリシア語のおちぶれた親戚として、不快な厄介な語法として、観察する態度を変えていない。それどころか、国家当局が現代ギリシア人をこの民衆語から出来るだけ早く解放しようと全力をあげているのである。

それゆえに、現代のギリシア人は小学校に入学した時から、年老いて遺言を書く日まで、日常生活で話している言葉を忘れ、そしてちがった、所謂「純粋な」言語を会得せねばならない。誰も語らない、上流階級さえも語らない、技巧的な魂のぬけがらのような、言語形式を自国語として学習するのである。ぶどう酒を、いつも言っている「クラシ」という単語のかわりに、古代ギリシア語のように「イノス」と言わねばならない。生活の身近にあるパン（プソミ）、水（ネロ）を古代のように「アルトス」「イドル」と言う時には、何か異様に響く。つまり「恋人」と言うかわりに「わぎもこ」と、「夫」のかわりに「背の君」と言わねばならないのである。

この結果として、ほとんどギリシア人は二つの言語形式のどれも正しく会得せず、正しい文章を作るという状態に至らない。生きているギリシア語、すなわち民衆語はたえず歪められ、虐待され、伝達手段として広範囲に用いられえない。

民衆語は学校で学ばれないだけではない。教会もこの言語形式を拒否する点では政府と一致している。話し言葉は教会の伝承的権威に敵対するものとみられる。民衆語を擁護する者はすべて無政府主義者、無神論者であると教会は

公言してはばからない。その証拠に聖書を民衆語に翻訳することは、大きな罰に値する罪として迫害をうけるのである。

第二には、このような状態であるから、有名なギリシアの詩人たちさえも、現代ギリシア語、すなわち民衆語を統一した文体で書くことが出来ないのである。D・ソロモス（一七九八―一八五七）という詩人はトルコの圧制と闘う英雄的民衆の姿を叙事詩『自由の賛歌』でうたい、現代ギリシア文学の父と称されているが、その手稿にはおびただしいイタリア語の注釈の欄がある。この詩人は彼の思考の過程を現代民衆語に翻訳するために、一生苦労した様子がうかがわれる。A・カルヴォス（一七九二―一八六七）も独立戦争のドラマ、ギリシア民衆のヒロイズム、闘争の苦しみを題材として、正義・自由・美徳・犠牲の精神を詩集『二十の頌歌』でうたいあげているが、その詩の言葉はあまりにも独得なものであって、特殊な方言と考える方がよいくらいである。つまり学校においては、古代ギリシア語を模倣する学習があっても、現代民衆語を組織的に学ぶ教育がなかったからである。

第三には、現代のギリシア社会は、精神的な創造者、特に作家に対しては好意的ではなく、むしろ敵意を持っている。それゆえに、多くの文学者はこの社会と同化出来ず、無関心と軽蔑でもって疎外される。彼らは芸術家なり知識人として沈没か坐礁するより外に手はない。A・パパディアマンティス（一八五一―一九一一）は神秘主義の巨匠として、多くの小説を残しているが、それらの出版はほとんど死後のもので、生存中はアテネの社会にあって常に貧困に苦しめられ、惨めな生涯を終えた。

作家たちに対する、ギリシアの社会の悪意は、死後も終らないことがある。たとえば、世界的な作家として「ゾルバ」や「オディッセイア」で名高いN・カザンザキス（一八八三―一九五七）はドイツで亡命同様の姿で、客死したの

であるが、生前の一九五五年にクレータの教会は、生れ故郷でこの詩人を葬ることを拒んだ。前述のカルヴォスも百年前に英国で死んでいるが、一九六一年にノーベル文学賞作家のG・セフェリス（一九〇〇―一九七一）が英国大使としてロンドンに赴いた時に、はじめてカルヴォスの墓が捜され、或る小さな町の墓地で発見されて、その骨が故郷のザキントスに持ち帰られた。しかもカルヴォスは今日のギリシアの体制が容認している数少ない詩人の一人であり、その詩人すらこうである。これらの例は百五十年以来ギリシアを支配している反精神的な風土の見本である。文学はこのような雰囲気の中で、窒息しそうな危険にさらされているのである。

## 三

今日のギリシアにおける文学的状況はどうか？　G・ル・フォールは書いている。「しかし詩人は生れながらにして唖である。」このスイスの女流作家とはちがった意味で、現代のギリシアの作家は唖であることを余儀なくされる。しかし唖を強制する口枷から自らを解放すべく闘うことが最大の急務なのである。

学校教育はまったく伝承を守るためにだけなされている。紀元後二世紀以来、ギリシア語では読むに値する重要なものは何にも書かれていないと子供達に伝えられる。一方、古代作品については、その内容を吟味することなく、暗記という方法で学習される。ホメーロスの二つの叙事詩、各二十四巻、各一万五千行前後を、出来るだけ短い期間で暗誦することが、国語教育における最重要事なのである。このような教育方法のために、生徒たちは古代ギリシアにも、もうあきあきしている。

現代のギリシア詩人とその作品は、忘れられるか、或いは計画的に無視される。たとえば、リルケやヴァレリーと

同年代で、彼らに匹敵する国民詩人K・パラマス（一八五九―一九四三）にしてさえも、まだ一度もアテネ大学の講義ではとり扱われていない。

一九六四年にG・セフェリスはギリシアではじめてのノーベル文学賞の栄誉をうけた。だが一昨年死去したこの詩人は、世界的な栄誉をうけても、ギリシアの学士院会員として迎えられたこともなく、大学の演習で読まれたこともなく、また彼の作品についての組織的な批評も国内ではなされなかった。ノーベル賞を受けた翌々年に新しい詩集が発刊されたが、批評界もジャーナリズムも沈黙でもって答えた。

出版界はどうかというと、ギリシアでは文学書は商品として認められていない。それは印刷され贈られるものであるが、読まれるものではない。ひまさえあれば、大ていのギリシア人は「タベルナ（居酒屋）」で時をすごす。外向的に育てられている民衆は読書よりも居酒屋での楽しみを選ぶ。ギリシアを旅行する人は、誰もがギリシア人の陽気さ親切さに気づく。しかし一方、その裏にある、浅薄さや教養のなさについても否定出来ないであろう。彼らは無味乾燥な学校教育の結果、学問や教育に対しては嫌悪しか抱けなくなる。更に低い所得水準は文学書をぜいたく品にする。不完全な書籍市場、図書館や批評機関の貧弱さ、すべてこれらは文学にマイナスの作用をもたらす。

その上に、文学書を読む人には一種の罪悪意識が心理的要素として加わる。読書はギリシア社会にあっては、時間の浪費として、生産的目的に反する行為としてみられる。グラビア雑誌以上のものを読もうとすれば、若い人々はどんな本に目を向けるべきかを知らないのである。というのは彼らは現代ギリシア文学の有名な作品や作家について全く教えられていないからである。絶版になっている、すぐれた古典的作品を新しく出版することに、出版社はちゅうちょせざるをえない。それゆえに、十九世紀や今世紀初頭の有名な作品を、アテネの本屋で捜そうとしても徒労に終

ることが多い。それらの多くは忘れられてしまっている。前の世代の作家達は、先輩の影響にめぐまれず、第一歩から独力で彼らの作品を創った。今日の若い人々も作家となるためには、独学者として第一歩から始めねばならない。彼らには以前の世代の作品が知られていないからである。未来永劫にわたって、同じ仕事を第一歩からくり返さねばならない、シシュポスの神話は、まさしく現代ギリシア文学の実状をついている。

今日のギリシアでは、文筆一本で生計をたてていくことは出来ない。だから作家は副業となり、医者や弁護士、広告屋やサラリーマンという本職を持った人が創作活動をして、作家たちのサークルに仲間入りする。その上、作品の出版の場合には、ほとんどが自費出版である。作家となるためには、出版する資金がなくてはならない。欧米や日本のような意味での出版社というものはほとんどない。出版社は著者と印刷屋の仲介者にすぎない。出版社に原稿と費用を渡せば、印刷屋と交渉して、本が出来上るのである。だから作家自身が自分の創作を一種の趣味として、素人の仕事として考えるようになる。また、文才のない人でも、資金さえ持っていれば、作家の仲間入りをすることが出来る。両方の側において、ジレッタンティズムが支配するという、困った事態が生ずるのである。

このような状態の中で、一九六七年四月に軍事独裁政権がこの国に突発した。

## 四

M・アナグノスタキス（一九二五―）は「社会科の草案」という詩でギリシアの教育についてこう皮肉っている。

靴屋はいつも頑丈な靴を製造すべし、
教師は政府の周到な教育計画に従うべし、

交通巡査は違反者を厳しく罰すべし、
造船業者はいつも新しい船を進水すべし、
商店は営業規則にしたがって開閉すべし、
労働者は生産性向上のため励むべし、
農民は消費水準低下のため励むべし、
学生は教師の教えにならい、政治を口にすべからず、
運動選手は度を越して贈賄されるべからず、
裁判官は最良の知識と良心に従って判決すべし、例外の場合は政府の指示にしたがって。
新聞は荷担ぎを不安にするようなことを書くべからず、
詩人はいつも美しい詩を書くべし。

現代ギリシアの教育は「ギリシア的キリスト教的教育」という名の下でおこなわれる。しかしこの教育理念の内容をたずねても、何ら具体的な答は帰ってこない。だが、伝承を無視した、新しい創造的精神はこの「ギリシア的キリスト教的」なものに反することになり、排除されねばならないのである。つまり、何であろうと新しいもの、進歩的なものに反対して、旧来のものを固守していこうとする保守反動的な態度が、彼らのいう「ギリシア的・キリスト教的」行き方なのである。

支配権を握った軍人たちは、平均的ギリシア人と同様に、この所謂「ギリシア的・キリスト教的」反動教育の産物

である。彼らは学問や教養に対してどんなセンスも持たず、知識階級を圧迫することが世の為、国の為と考えている。保守的な農民層と一しょになって、進歩的なインテリ層に向ける、敵意と軽蔑の政策がますます強まってきた。

旅行者に、ある村で村長が断言した。ギリシアは今迄にこんな良い政府をもったことがなかったと。村長は選挙でなくて、政府による任命である以上、当然のことである。人間には善人と悪人とがあるが、この村長によると、今ギリシアで大道を闊歩している人間は皆善人である。悪人は刑務所に入っている。非常に多くの科学者、弁護士、医者、芸術家、それどころか王室に忠誠な軍人達まで、ここ五年以来あちこちの島にある強制収容所に入っている。彼らの信条は「ギリシア的・キリスト教的」でなくて、不健全であるから。たった一枚のちらしのために、長い刑期をつとめている学生たちも多くいる。

現政府の転覆を共謀したという罪で、三十四人の有名人が訴えられた裁判があった。その中には大学教授や経済学者、法律家、退役軍人などがいた。多くの信望のある人々が、弁護に立って、被告たちの人格の高潔さ、祖国のために果した功績、彼らの動機の一時的な純粋さを証言した。被告たちも怖れることなく誇りをもって議会民主主義に対する彼らの忠誠について語った。特に注目されたのは刑法の教授G・マンガキスの言葉である。彼は法廷においても、教壇におけると変りなく、人間の尊厳の唯一つの保障は法治国家であるという信念を隠そうとしなかった。教師としても人間としても、彼は生徒たちの愛と称讃を得ていた。裁判において彼はこの数ケ月の苦しみを語った。彼にとって一番恐ろしかった拷問は夫人が四年間の懲役刑に処せられたという報せであった。なぜならば彼女は夫のうけた拷問を公然と人に告げたからである。

この判決の日には被告の友人たちが不安な気持に充たされて、軍事裁判所の前で決定を待っていた。その中には外

国の大学から救援や請願のためにやってきた友人もあった。突然誰かが吉報をもってかけ出てきた。居合わせた者たちは安堵の胸をなでおろし、軽い刑のために嬉し涙を流しているものもいた。カラゲオルガキス教授に対しては無期刑、マンガキス教授には十八年の刑が判決されたのである。このようなことが現下のギリシアでは吉報なのである。

## 五

文学に対して軍事政権が最初にうった手は、発禁書のリストの作製であった。それは一九三六年にメタクサスのファッシズム政権が行ったやり方よりももっとひどいものであった。すべての文学書は二つのカテゴリーに分けられた。すなわち販売が許されるものと、許されないものとの二つである。発禁書としてブラックリストにのった文学書には古代のギリシア悲劇もいくつかあった。それは左翼的作家によって現代ギリシア語に翻訳されている故に発禁にされたのである。また、一八二〇年代のギリシア独立戦争の戦士たちの回想記も発禁処分を受けた。それは左翼系の出版社から出されているからである。当然左翼系作家のものは発禁のリストにあげられ、K・ワルナリス（一九〇八―）やI・リゾス（一九〇九―）のような代表的革命詩人は、流刑の目にあった。

リゾスは、ヘルダーリンのように、革命思想を神秘的な調べにのせてうたいあげる詩人である。若くして革命に憧がれ、その姿勢をつらぬき続けているゆえに、政状が変る毎に、栄誉と称讃にみたされた愛国的詩人としての地位と、政治犯収容所における捕われの身という壊遇を、行ったり来たりする。初期の詩集「死者の嘆き」は一九三〇年代のファッシズム政権のもとで発禁となる。第二次大戦後この詩人は再び脚光をあびるが、国を二つに分けての内戦において共産側として逮捕され、一九四八年から五二年迄リムノス島やマクロニッソス島で収容される。この、共産

主義をギリシアでくいとめるというトルーマン・ドクトリンによって、ひきおこされた国内戦争の体験を「報告」という詩でこう歌っている。

夕暮れの雲、カテドラルの時計の明り、
すり削られた樹々、寒さ、衰え。丘の上では
まだ砲撃の響きが止まなかった。しばらく後に
ギオルゴスが自転車でやってきた。床の上に
かれは弦の切れたギターをおいた。「死んだ者たちだ」と
かれは言った。僕たちは納屋に運びいれた。
「丁重に弔う余裕がないのだ。
だが、この名簿をしまってくれ。後の日に
かれらの名や年令を忘れないために。」
僕はかれらの靴のサイズも書きとどめた。
「あの三人の石工たちも斃れた。残っているのは
ただ首のないかの天使像だけだ。その上に
なにか首を置いてくれ。」そう言って立ち去った。
ギターを残して。

内戦が終って、再びアテネに帰ることが許され、ともかくも、議会民主主義の政府の下で、抒情詩人として国家からも表彰される。「ギリシアに寄す」という詩でこううたっている。

折れたぶどうの樹、石、いばら、そして一つの壺。
小さな野は荒れ果てゝいる。家は数年来閉じられたまゝ。
かの時以来ヴァンゲリスは帰っていない。
馬小屋のうしろには海が見える、青さを濃く映して。
馬をかれは苦しい時期に売ってしまった。
赤い馬で左の目に白い斑点があった。
かもめの羽根が枯枝の上に落ちてきた。
向い側の戸口に老婆がいた。彼女は語った。
「息子よ。わしたちはこんな嘘で生活をつないでいるのだ。」
一方は何も語らなかった。かれは遠くに目をやり、
十字をきって歩み出た、あたかも老婆の手か、
かの羽根に口づけしようとするように。

外国人の感ずるギリシアのイメージとは何とへだたっていることか！　さて、この詩人は軍事政権発足と同時に、ヤロス島やレロス島の収容所をあちこち転々と移送される。自国の政府からは犯罪人として取扱われ、拘束の身で苦

しんでいる一九六八年に、外国でむしろこの詩人が認められはじめてきた。リゾスの詩集「目撃者の証言」の独訳が、現代ドイツ文学における第一級の詩人M・フリッシュの解説を付して、チューリッヒから出版されている。同時にフランクフルト・ハイデルホッフ社やベルリン・K・ヴァーゲンバッハ書店からも詩集が出版され、更にマインツ大学はアカデミーの海外会員としてこの詩人を選んだ。これは勿論救援の意味もあったのだろう。彼の作品は十七ケ国語に翻訳された。国際的な抗議に屈して、軍事政府は重病のこの詩人を島からアテネへ移した。今リゾスは刑務所病院の一室で、痛む心と体を横たえている。

アッティカ地方の南端スーニオン岬には、紺碧の海を背景として、海神ポセイドン神殿跡がある。大理石柱が何本も白く輝きながらそびえ立っている。この光景に感激して旅行者は、何か形而上学的な冥想にとらわれざるをえない。ところで、この岬の神殿跡に立って、目を東に向けると黒くマクロニッソス島が浮んでいる。これも、現代において作られた魔の島である。T・パトリキオス（一九二八―）はここの政治犯収容所をこうスケッチしている。

風は夜にたかまると、
人の静けさは増してくる。
島よ、おまえの心臓の囲りには
鉄条網が張られている。
地震にものみこまれない島よ、
おまえは石のコンパスで
われらの道の、歴史と時代の

南北を示してくれる。
大波は砕けて逃げる、
砕けて逃げる、
この岩壁に耐えられず
大波は砕けて逃げる。

便所には太いうじ虫。
溝からは大きな野ねずみがはいあがり、
朝になるまで何かをかじる音、
臆せずに顔の上を走りすぎ、
やせおとろえた猫では手が出ない。
昼はからすのように山に隠れていて、
夜に現れてくるのだ、兵隊たちがオナニーにふける頃に。

夜のパトロール、雨戸の金属的な響き。
便所のうしろで、月の光に照らされて、
男同志の営み、

一人には妻子があった。
スカルヴェラスとかいう男が
僕の気を引こうとして、三角の鼻を
こめかみに押しつけてきた。

この「マクロニッソスのスケッチ」という詩で詩人は、ナチスと戦った老闘士の泥酔の際のくり言、重労働の苦しさなどをうたいながら、政治犯の苦しい日常を訴えている。

## 六

既出版のものは販売許可か不許可かの二つに分けられたのであるが、今後出版されるすべてのものに対しては、事前検閲が制度化される。出版社は検閲済みのスタンプのないものを絶対に出版しないようにという指令をうけた。もし違反すれば軍事裁判にかけられると脅迫された。検閲済みのスタンプを得るために、著者は筆稿を当局に提出しなければならない。そして特高警察によって過去が調査され、身辺が監視される。かつて、合法時代の共産党機関紙「赤ばら」に紀行文を寄稿したというだけで、革命や破壊主義のにおいを、無知な警察はかぎつける。軍隊生活で仕込まれたため、二人の青年が肩を並べている表紙絵をみて、ホモセックスを仮定する。これは本当にあったことである。

この事前検閲を避けるために、ほとんどの作家は筆を折った。丁度印刷にかかっていた作品でもそれをひっこめることを択んだ。ノーベル賞作家セフェリスも沈黙することによって無言の抗議をした。三年後に彼の沈黙を破ったの

はこのような状況に対して今度は声を大にして抗議するためであった。

また、筆稿のままで自分の作品を仲間に配った作家もいた。或る批評家は現代ギリシア文学論を発刊するために、現代の偉大な散文作家G・テオトカス（一九〇五―）の章を全部削除せねばならなかった。それでも出版を思いとどまらなかった功績で、その直後にアカデミー会員に昇格したが、このようなことは例外的であった。

ほとんどが歌わぬ詩人となり、書かぬ作家となったが、それがかえって作家仲間の結びつきを強めることとなり、はじめの頃は慎重であったが、後にはだんだん腹をうちわって状況について議論し、将来いかなる姿勢をとるべきかについて互いに問いはじめた。

軍事政権がその成立の二年目に入る頃には、アテネではいくつかの文学サークルの夜会が催されて、未刊の作品が朗読された。場所は憲兵や特高の出入りできない所、例えば外国の文化会館などで行われた。検閲のために出版は出来そうにないが、民衆と深いつながりを持っている、若い作家の詩や散文が朗読され、また多くの人々によるディスカッションも催された。時には、アテネを旅行中の外国の作家や批評家もそれに加わった。H・ベンダー、W・イェンス、S・メルヒンガー等も一九六八年のこのような夜会に加わっている。話されている民衆語が、書かれている純正語のかわりに現われた。文筆家や知識人の間に信頼に充ちた戦友精神のようなものが生じた。この堅い団結心が右翼と左翼の間のかつての対立や相違を克服した、第二次大戦のナチス占領時代におけるように。

この頃、NATOの外相会議において、デンマークのハートリング外相はギリシアのファッシズム政府への武器供給を中止するように関係諸国に要請している。ギリシア外相ピピネリスはアテネの現体制に対する批判を石のように硬直した顔をして聞いていた。しかしNATO事務局長ブロシオの裏面工作によって、内政干渉的発言をとりあげな

いことに成功した。かくて、ギリシア代表の爆弾声明や退席が回避された（DPA通信）。

しかし、このことは軍事政権にショックを与えた。正式の外交機関までを通して、しかも友好国から抗議された以上、政府は形だけでも自由な国というゼスチュアーを示さざるをえなかった。事前検閲制度を廃止した。しかし同時に、現行法に則した秩序に反対する印刷物に対して、ドラコンのような刑罰を規定した法令が決定された。この法令によれば最も軽い刑が一年の懲役である。

独裁政権はギリシアを今のような精神的硬直状態から解放する政策をすすめると称して、その最高責任者として、かつて極右の群衆の先頭に立って国会に侵入して、罪の宣告をうけた、或る作家を選んだ。そして次のことを布告した。あらゆる新聞や雑誌、モード雑誌でさえも、国民のために精神的栄養を調達するために、この右翼作家の編集したギリシア散文集からの物語を、週末毎に載せるべきであると。

この散文集に入れられた作家の中には、軍事政権に対する抗議から、もう出版をのぞんでいない作家が少なからずあった。彼らはこのような著者の権利を無視した、無礼なやり方に怒った。そして『十八人の作家の宣言』となる。その宣言を抜萃しよう。

「ギリシアが精神的自由を享受しているという印象を、国の内外に与えるために、同意を得ずして無理やりその作品が新聞や雑誌に載せられた作家たちと、我々は怒りを共にする。実りある思想の交換や、自由な意志の公然たる流通を阻止している法令がある限り、種々の本が発禁され、作家がその信条ゆえに迫害をうけている限り、精神的自由はありえない。精神的自由は、学校教育において我々の生きている言語、民族文学の言語を抹殺しようとする試みとは、結びつきえない。これらすべては、我が国の知性に対する弾圧の証明である。勿論これはギリシアの知性が受け

るべき大きな試練でもある。」

この『十八人の作家の宣言』は、その中のある人々にとっては不幸な結果をもたらした。作家N・カスタグリスは二十年も勤めていた銀行から解雇された。R・ルーフォス（一九二四―）やM・アヴュロフは旅券を取りあげられた。ほとんど他のすべての作家も特高にマークされ、行動が監視されることになった。しかし、この宣言は国際的に高い注目を受けたという点ではポジティヴなことであった。この大胆な行為は先例を作った。国内における思想的気流が変った。軍事政権に対して公然と批判する勇気が生じた。

ほとんど同時に、ノーベル賞詩人セフェリスが三年目に沈黙を破った。彼は勇気をもって公然とギリシアを支配している状況に烙印を押した。ここでその一部を引用しよう。

「強圧的な政治がこの国に突発して以来、はや二年間が過ぎた。この状態は、全世界や我が国民が第二次世界大戦において、そのために偉大な戦いをした理念と、完全に矛盾するものである。我々があらん限りの苦しみと闘いによって獲得したところの精神的価値は、今や泥沼に沈もうとする危険にさらされている。しかしこの危険よりももっと恐るべき重大事がある。

すべての人々は過去の歴史的経験によって、独裁というものははじめはたやすいように思われるが、しかし結末は必ず悲劇となることを知っている。アイスキュロスの劇のように、この悲劇的進行が我々を不安な気持へかりたてる。この異常な状態が長く続けば続く程ますます、災いは拡がるであろう。」

このセフェリスの宣言に対して、軍事政権にコントロールされている新聞は、この上もなく激しい仕方で攻撃した。或る新聞はこの詩人を幼稚な老人としてみたてて、センセーショナルなやり方によって、再び公職を得ようとす

る無駄な努力とまできめつけた。この宣言の翌年に、セフェリスはイタリアの大学から名誉博士号を贈られて、式に出かけようとした時、旅券が政府によって取りあげられた。この詩人は、現在のギリシアの状態を、外国から帰ってきた友と、ずうっとギリシアに住んでいた友との対話体でこううたっている。

「他国より帰りて」

友よ、君のさがしているものは何なのか。
長き年月、自国を遠くはなれて
異国の空でつくりあげた
イメージを抱いて、君は帰ってきた。

僕は昔の庭をさがしているのだ。
しかし、胸までしか樹々はとゞかない、
丘は階段のように低い。
だが、僕の子供の頃は
草は高くおい茂げり、
その広くて暗い影の下で遊んだものだ。
何時間も　息もつかずに

丘の上をかけめぐったものだ。

友よ、気をしずめてくれ
君はだんだん慣れてくる。
君が昔知っていた小路を
そのうちに一しょに歩むだろう。
この宇宙の大空の中で
そのうちに一しょにくつろぐだろう
そのうち君にも見えてくる、
かつての庭と丘とが。

僕は昔の家をさがしているのだ。
大きな高い窓をもち　その家は
野生のキズタでおゝわれていた。
僕は古代の柱をさがしているのだ。
水夫たちがまなざしを向けたその柱を。

どこにその家があるのだろう。
こゝでは屋根は肩までしかなく、
僕が目を向けるところ
見えるのは、ひざまずく姿ばかり、
すべてが祈りに沈んだように。

アテネのアメリカ大使館に勤めているミラー氏は、セフェリスとは立場がちがうが、同じような憂いをもっている。彼はフォードで時々小都市や村へドライヴする。彼は少しばかりギリシア語が話せる。「彼らはみな親切だ。私は農民や官吏や教師としゃべった。しかし、彼らが実際に何を考えているのかわからない。彼らは多分満足しているのであろう。かつての指導的な支配階級は、聖職者、教授、保守的将校、アテネの名門などであるが、彼らは反アメリカ的、親西欧的であり、そして現政府の敵である。そこで現政権が長く続くと西向きの、自由なギリシアという精神的傾向は失われてくるであろう。精神的エリートは北と南に分裂する可能性がある。彼らが現在の絶望や幻滅から身を放そうと必死になる時、西が後退して、現代ギリシアとの結びつきが完全に解かれるであろう。その時、北のスラヴ、南のアラヴの影響がすざまじい勢いをもって流れこんでくる。ただ、現在のＮＡＴＯによる政治的同盟や国内の強圧政策だけでは将来のギリシアの安全は保障されない。」

一九七〇年に作家に対する二つの裁判があった。この二人は「十八人の作家の宣言」の一員として署名したのであるが、その告訴の理由は、軍事政府がはじまる時期よりもはるか以前に、出版された彼らの小説に、猥褻な描写があ

つたという理由である。判決はもちろん無罪であったが、この二人の作家を、彼らの反政府的宣言ゆえに罰し、或いは少くとも脅迫しようとする軍事政府の試みであることは、誰の目にも明らかであった。

事前検閲が廃止された。これは政府が自由化というポーズを外国にしてみせるためであった。しかしそれにかわる法令によって言論統制は続けられている。その具体的例として「国民新聞」がやり玉に上った。この新聞は、キュプロス問題の解決のために、国の全階層からなる統一政府を作ろうというジグディス前大臣の提案を載せたため、主筆は長期の有罪判決をうけ、新聞は廃刊となった。

二人の作家の裁判といい、「国民新聞」の事件といい、ギリシア人はまだずうっと思想統制、戒厳令下で生活しているのである。

ギリシアでは講演会は特高の陪席という条件で許可される。特高はいつでも講演を中止させる権利を持っている。或る時、現代のギリシア文学についての講演のため、或る批評家が招待された。彼は冒頭で、現代ギリシア文学を公然と論ずるには、政治的臭いのかけらがあってもそれは許されないということを強調した。本題に入ろうとした途端に、特高によって講演の続行を禁ぜられた。彼はその説明を要求した時、あなたは善良な愛国的詩のかわりに、退廃した文学について語ろうとしているからという理由であった。

## 七

さて、このような苛酷な政治的条件の下にあって、作家たちは書くべきか書かざるべきか？　書くとすれば、何を書くべきか？　文壇は、この問題に論議の焦点を向けてきた。結論は三つに分れる。第一には、書かないことによっ

て抵抗の姿勢を示しつづけること。第二には、政治と無関係な問題を書くこと。第三には、進んでギリシアの現状を告発すること、しかもそれを巧妙にやることである。

この問題について、軍事政府に抗議した十八人の作家の一人、外交官出身のR・ルーフォスの主張を紹介して、本文を結びたい。

書かないというストライキを頑強に続けようとしている作家たちは、軍事政権発足以来言論に対する弾圧政策は、現在までちっとも変っていないとみている。発禁された本のリストは相かわらず効力をもっている。禁止されたレコードのリストも同様である。ラジオは、野蛮な悪質な話し方に、趣味の悪い音楽に従えと命令しつづけている。事前検閲が廃止されたのはよいが、それにかわって出てきた出版法は同じように弾圧的である。「国民新聞」の例でも証明出来る。我々がすべて例外なく、好きなことを書くという自由を持たない限り、我々が再び書きはじめても、それは獄にある友に対する裏切り行為であり、軍事政権への奉仕となろう、と主張する。

ルーフォスはこの主張をまじめにとりあげながら、こう反駁する。それでも事態は新しく転回した。新しい出版法は弾圧的なものであるとしても、事前検閲とは著しく異った状況を呈している。以前は検閲官は作品を印刷する前に見て、文や句や章を削除する権利を持っていた。場合によっては、本全体を発禁にする力をもっていた。今日では、出版社もろとも牢獄に投げこまれる危険はあるにしても、好きなことを書いて活字にすることが出来る。この新しい状況は、西欧デモクラシーにおいて出版の自由といわれるものと似ても似つかぬものであるとしても、以前より多くの活動領域が開かれている。例えば、「国民新聞」は事前検閲があったら、あのような記事を載せることが出来なかったろう。この新聞が政権交替について公然と語った時、はじめて弾圧機構を動かす口実が見つけられたのである。

だから、宗教とか軍隊を直接に非難しない限り、不服従を煽動したり、国の経済情勢の悪化を批判しない限り、ギリシアに張りめぐらされているＣＩＡの組織をあばかない限り、印刷物は法によって攻撃されることはない。

作家の身の安全という立場からすれば、沈黙を保ちつづけていることは利益となろう。しかし、これは軍事政権をして出版の自由が保証されているという口実を与えることにもなる。権力にこのような満足感を与えるのは正しいことか。それよりも、このジレンマの前にたえず身をおいて、それが小さい声であれ、公然と語るのが精神的創造者の義務ではないかとルーフォスは主張するのである。

しかし、この事は形而上学的問題や文献学的・民俗学的研究を発表することを意味しているのではない。作家達が再び公に発言する際には、彼らの信念を表現するという目的を持たねばならない。「十八人の作家の宣言」に強調されているように、精神的自由というものが最も高貴なものであるという信念が貫かれていなくてはならない。すべてを言うことは出来ない。またその必要もない。現代のギリシアの作家の使命は、自己の人間としての威厳を裏切ることなく、そして迫害されやすい口実を与えない表現形式を見出すことであり、作家自身がモルモットとなることが重要なのである。

その実験として、政府弾劾の声明を出した十八人の作家から、それぞれ一つの作品を集めた「十八のテキスト」なる小説集が発刊された。この本は国際的に大きな興味をひきおこしている。

さて、作家というものは、少くとも彼が生きている世界の良心たるべく義務づけられていると、ルーフォスは定義する。ギリシアの現状の中にあって、作家たる者が、ただ何も考えずにエーゲ海の美しさを描写していることが許されるか。色彩の名を豊かに駆使して自然の美しさについて語り、はるか古代の神々を憶うというような作品を書ける

作家を、羨むと同時に、それは現下のギリシア作家にとっては全くのナンセンスだと言い切っている。ギリシアの海をみて、光と闇との往還の美に感激するのは外国の詩人の仕事であっても、現代ギリシア文学の問題とは何の関係もないのである。

カミュは若い時代の日記にこう書いている。「僕の書いていることは、僕の幸福から来ている。泳がねばならぬと同様に、僕は書かねばならぬ。僕の体がそれを要求しているから。」ルーフォスは昔はこの言葉を非常に好んで、アルジェの悲惨な現実を胸に懐きながらも、個人の肉体による文化形成に、全情熱を賭けた、カミュの姿勢に感激していた。それで、ルーフォスは以前は現状の讃美であれ、不正の告発であれ、政治的傾向のある文章は書いたことがなかった。しかし今では、これが正しいと信ぜられなくなった、と告白している。

正常な民主主義、自由な社会では、作家が彼の芸術を芸術以外の理念に奉仕させるかどうかは、その作家の自由な意志にゆだねられている。そして、政治参加の文学は非難もされないし、義務ともされえない。芸術を政治的や宗教的プロパガンダの具として用いることは、アリストパネスやクローデルの権利であった。しかし、また、そうしないという権利も、プルーストやリルケは持っていた。自由な社会にあっては、作家たちには社会の問題に関与する他の色々な可能性がある。選挙権もあれば、新聞で政治的発言も出来る。

しかし、これらの可能性が全く提供されえない、恐怖と不自由の時代と社会においてはどうか？　ソルシュニチンは小説でその恐怖政治の実態をあばくこと以外の手段で、スターリニズムと戦うことが出来たか？　この危機の時代にあって、作家は、芸術家としてではなく、人間として市民として立ち上り、自分の衝動を表現する義務感に駆られて、ペンを剣として用いる時、傍観的な態度で何も書かずに手をこまぬいている作家たちよりも、厳しい目にあわね

ばならない。ルーフォスの仲間の作家達は前者の困難な道を歩もうと決意しているのである。

特に、作家たちの急務は、民衆との結びつきである。女や子供もまじったピクニックの一団が、環になって歌っていた曲は、セフェリスの詩にテオドラキスが作曲したあの歌であった。もし当局に知られたら禁固刑に処せられる歌を公然と歌って楽しんでいる民衆の一団に作家は感激する。デモクラシー時代の首相パパンドレウーの葬儀の際、自由万歳と叫んで、いずこともなく去っていった、数万の市民たちとの連帯を手さぐりする。迫害に耐えながら、大胆さによって民衆の感覚に影響を与え、そして読者の層を拡げていく。このことによってギリシア文学は、その大きさを増し、社会的機能を獲得していけるのであり、今からがそのチャンスであると作家たちは確信するのである。